
幸せなおとぎ話を語ろうか

東城真雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せなおとぎ話を語ろうか

【Nコード】

N3560J

【作者名】

東城真雪

【あらすじ】

とある国のとある日常。

勝ち気なお姫様ローズと単純体力バカの護衛？ジル

そんな二人の関係はいかに？

第1話 お姫様の気持ち

私の国は、緑あふれると言えば聞こえがいいだけの、田舎の小さな国だ。

小さな国ゆえに周りの大国に目をつけられることもなく、ゆるやかに時が過ぎていく。

国民も皆家族に對に仲がいい。

そんな国が私は大好きだって胸を張って言える。

で、あんたは誰だつて？

私は、この国の王女Aよとでもしてちょうだい！

私は、第一王女ではあるものの出来のいい兄と弟に挟まれているため気楽に…いや、ちよっぴり…うーん、かなり？気が強く育ってしまったのよね。

唯一の女の子だからということ家族だけでなく、国中から甘やかされたのが原因だと密かに思っている。うん、間違いないわ。

そんな私にも最近悩み事というものができた。その悩みの種は、今は側にいないあいつ！

護衛役のジルックラフォード。顔はいいけど、単純体力バカだ。

そんなジルに…ジルに…くっ…私は恋をしてしまった！

最初は、ジルが近くにくると胸がもやもやするな〜と思う程度だった。それが次第にどきどきに変わり、しかもジルが近くに寄ってきたときだけだと気付いた時には…3日間ベッドでもだえましたともええ。

だけど、私はうじうじしてるのは大っ嫌い。

だから、ひとしきり悶えた後には、すぐさま行動を開始したのよ。

まずは日常の対応の変化。今まではあまり気にしていなかった言葉使いも、不自然にならない程度に女の子らしくした。

走ったり馬に乗るのが大好きだから普段はズボンを愛用してたけど、それも可愛らしく、かつ、適度に色気を演出できるドレスにかえた。美人ではないけれど、それなりの愛嬌を備えていると自負しているから、少しは気持ちを揺らしてくれるんじゃないかと期待していた。

なのにあいつ…事もあろうか、

「姫さま、最近変ですよ？お加減でも悪いのですか？」

ときたわけよ。

そうだ、単純体力バカのジルに間接的なアプローチが効くはずがな

い。悔しく思いつつもそう反省した私は、もつと直接的なアプローチをしかけることにしたの。

私の気持ちを知っている侍女のミリアに相談したところ、人生経験豊富な彼女は（といっても歳は二つしか変わらないのだけど）的確に様々なアドバイスをくれた。

ということで、いざ出陣！待ってなさいよ、ジル！

と、勢いをつけてジルを探しに出たのはいいけど、なぜか見つからない。

おかしいな。そんなに広い城じゃないのに…

「まさか…逃げられてる？」

まさかね。あのジルに何かを感じ取る繊細さがあるとは思えない。

うん。よし、もう一回探すぞ！！

そう意気込んでみたものの、あのバカはいっこうに見つからない。

あんなに目立つ奴がこんなに見つからないなんて！！

誇張しているわけではなく、ジルは本当に目立つのよね。

灰色の髪を短めにそろえ、顔はむちゃくちゃ整っている。身長も高くて無駄な贅肉のつかないひきしまった身体。

ただ、私といるときのジルといえばいつもにこにこ、何か言ってもはいはいと聞いているのみ。

私の護衛役をしているくらいだから、剣の腕はかなりある。

つまり、体力はあるけど、単純な奴ってわけ。

それがどうしてかお姉さま方には人気があるのよね…

確かに、武術大会とかでは優勝しちゃうし、そのときのジルはカッコいい…はっ！！

うつとりしている場合じゃなくて、早くジルを探さなきゃ！！

そうして探し続けてはや1時間…

いい加減何か作為を感じるってもんよね。

少し休憩しよ。せっかくキレイに結い上げてもらった髪も後れ毛がでちゃってる。

はっ。

一番キレイな姿を見てほしかったのに。

そうしてたどり着いたのは、城の中庭。中庭といってもそれなりの広さがあるし、いたるところに背の高い木が植えられているからまるで迷路みたい。

そんな中私が見たのは衝撃の光景だった。

背の高い木の並ぶ庭の中心部だ。花が咲き乱れ、いいにおいがあたり一面にただよっている。

ジルが。ジルがいる。

そして…

その腕の中には…

髪の毛の長い、大人の女性がいた。

信じられなかった。見たくなかった。

ジルは誰とも付き合っていないと思っていたし。

ううん。信じたくなかっただけ。

だってジルは大人だもん。そういう相手が居るかもしれないってことは想像できた。

でも、それを認めたら心が壊れちゃいそうだったから、蓋をしただけ。

涙がとめどなくあふれてくる。

でも、駄目。

いまここで嗚咽をたてたら、ジルに気づかれちゃう。

今なら大丈夫。このまま気づかれなければ、明日からはまた普通の主従に戻る。

だから…

そう思い、たつと踵を返してその場を去る。それをジルが見ていたとも知らずに。

どこをどう走ったのか分からなかった。気づくと、お兄様の部屋の

近くに来ていた。

ふらふらと、今にも倒れそうな私を抱きとめたのは…ジルだった。

「どうして？」

それしか言うことはできなかった。彼が私をぎゅっと強く抱きしめたから。

「姫さま…どうしたんですか？誰に泣かされたんですか？俺が仕返ししてあげます。さあ、名前をおっしゃって下さい」

そんなジルらしい言葉に笑いがこみ上げてくる。

普通ならいい雰囲気になるこんな状況でさえ、私たちは主従でしかないのだと。

「…バカ」

「え？」

「バカバカバカ!!」

そういつてジルの硬い胸板を叩く。

困惑した様子でジルがこっちを見ているのは分かっているけど、止められなかった。

「なんで気づいてくれないのよー!!」

「ひ、姫さま!?!」

「私はジルが好きなのー!」

……

「ええええええ!?!」

やっぱり…そりゃそうよね、急に言われたって信じられないよね。

ちろっとジルの顔を抱きしめられた腕の中で伺えば、固まっている様子が見える。

だめ…か。

わかっていた。庭であの光景をみてから。

急に脱力感が私を襲う。失恋したんだ。私。

そう思うと涙がでてくるが、今泣いたらジルが困る。だからがまん！！

そうして私はずっとジルの腕の中を抜けようとした。

でも、抜けられない。

またジルにぎゅっと抱きしめられたから。

「ジル…？」

「ほんとに？ほんとに俺が好きなの？」

噛んで含めるように確かめてくる。心なしか、言葉遣いがいつもと違うような…。でもそんなの気にしていられない。

「だからそうだって言ってるじゃない！」

自分の気持ちが伝わらないことに苛立って、語気が荒くなってしま
う。

ジルは、そんな私をさらに抱きしめてくる。ちょっと苦しいかも…

ただ、あの後は大変だった。

お兄様の部屋の近くで抱き合っていたものだから、案の定お兄様に見つかってしまったのよね。

極度のシスコンを内外に宣言しているお兄様の怒りはすさまじかった。

私は絶対お兄様だけは怒らせないよう誓った。普段温和なだけに…今思い出しても背筋がぞくつとする。

なにはともあれ、今は城でも公認のカップルとなっている。

ただ…気のせいかな？

単純体力バカだと思っていたジルが時々黒く感じるときがある。

ううん。そんなことないよね？

うん。勘違いだ。

なにはともあれ、今私は最高に幸せだわ！

第2話 護衛の気持ち

俺の国は小さな小さな国だ。緑あふれる平和な国だから、国民は小さな国ゆえの平和だと勘違いしているらしい。

だが俺は知っている。この国の王がのほほんとしているように見えて実はかなりの政治手腕を持っていること。

その後継ぎとして外交に力を入れる第一王子と第二王子も温和そうに見えて実はかなりの腹黒だということを。

王族の中で唯一裏表のない、まあつまりは単純な頭の持ち主は真ん中の姫君、俺の仕えるべき主であるローズ姫だろう。

で、お前は誰かって？まあ、素敵な護衛Aとでもしておいてくれ。

あ？なんか聞いたことのあるフレーズだって？気のせいだろう。

なんの話してたんだっけ…ああ、そうだ、俺の仕えているローズ姫のことだったな。

本人は自分のことを特別きれいとも思っていないようだが、周りからすればもはや害と言っていいくらいにきれいな姫君だ。

やわらかく肩にかかる金の髪。瞳は琥珀色で肌はぬけるように白い。

華奢な体には不似合いなほど、出るところは出てる。

普段はじゃじゃ馬でズボンばかりはいているが、それすら形のいい

足を表現しているにすぎない。

まあ、俺はそんな姫君の護衛役として日々おいしい思いをしているわけだが、害があると思われるから害のない単純バカを演じている。

そんな姫がどうやら俺のことを好きらしい…と気付いたのは、あからさまにアプローチをかけたからだ。

まあ俺も自分に目を向けるように色々種を植え付けていたから、当たり前といえば当たり前。

けどそのアプローチがいただけなかった。

言葉使いをあらためるのはいい。だけど、目に毒なほど肩のあいたドレスを着るといふのはどうか。

いや、俺に見せてくれるのはいいが、他のやつにまで影響がいくのはおもしろくない。

だから、

「姫さま、お加減でも悪いのですか？」

なんていかにも気付いてませんというふうな発言をしてやめさせた。
わなわなと震えて相当ショックはうけていたが。

まあこれに懲りたら、俺だけに直接的なアプローチをかけてくるだろうから、結果オーライということだ。

しかし敵は城のうちにいた。

姫の兄王子と弟王子だ。やつらめ、姫の侍女から姫の気持ちを聞き出すやいなや、即妨害をはじめた。

まあ、つまりは、俺が姫に近付けないように下らない仕事をふってきたわけだ。

あの腹黒たちが！

きっと俺を探しているであろう姫のことを思うと、イライラが募る。
だがここで手を抜けば奴らに何を言われるかわからんから、仕事は完璧にこなす。

そして仕事を終え疲れ切っていたため、庭で一服しようと木にもたれかかっていたとき、一人の女が近づいてきた。

王妃つきの侍女だった。

まあこいつとは所謂幼なじみの関係で、城では唯一気を抜いても話せる。

しかし、そんなやつが急に抱きついてきたときにはびっくりした。

なんだ？と聞こうとしたが、すぐに静かにしろと囁かれる。

そして目で示す先を見れば、姫が木の影からこちらを見ていた。

その顔はいまにも泣きだしそうだ。妙にきれいな格好をしているため、自分を探しにきたのだとわかる。

つまりは、姫の気持ちを確かめようとこいつは抱きついてきたわけか。

その顔は笑いをこらえており、目尻に涙がたまっている。

鬼だな、こいつは。

姫だけじゃなくて、俺のあせる姿も見なかったのだろう。

俺に抱きつきながら必死に笑いをこらえている奇妙な姿をみていたら気が抜けて、怒る気も失せた。

ただでさえ仕事で疲れてるのにこいつは…

とげんなりしつつ、横目で姫がいる辺りをうかがえば、さっと踵を返し去っていくところだった。

これを放置していたら絶対ややこしいことになる。

そう確信した俺は、腕の中で笑い続ける幼なじみを押し退け、姫の後を追う。

後ろからは「がんばれ」と、たいして気のもらない応援が聞こえたが、無視。

姫は思ったより走るのが早く、既に視界から消えそうだったが、まあ伊達に鍛えているわけではない。

すぐに追い付いたがそこは…腹黒兄王子の部屋の近くだ。

ここで派手に泣かれるとまずい。そう直感した俺は、ふらふらと倒れそうになっている姫を腕の中に閉じ込める。

まさか俺がいるとは思わなかったのだろう。どうしてと弱弱しく尋ねてくる。

その表情がひどく心細げで、抱き締める腕に力がある。

まさか気付いてましたと言うことも出来ず、誰かに泣かされたのかと言いつづ。

そんな的外れな質問に苛立ったのか、

「バカ！」

と怒られた。

バカバカといいながら胸をたたいてくる少女に愛しさしか感じない俺は、本当に馬鹿かもしれない。

そんな自分に驚いていたから、もしかしたら困惑していたように映ったのかもしれない。

大きな声で愛の告白をしてくれた。

一応驚いとかないとな。そう思い声を出すけど、もしかしたらわざとらしくったか？

ちらりと上目遣いでこちらを伺ってくる姫を襲わないようにするのに、理性を総動員した。

まったく！第一王子の部屋の近くでさえなければ！

そんなことを考えていれば腕の中から抜けようとしていることに気付く。

これは勘違いしたな。

俺は、再び彼女を腕の中に閉じ込めて、その華奢な体をぎゅっと抱き締める。

すると、視界の隅で何かが動くのを捉えた。

…あれは第一王子か。きつと外の物音に気付いてでてきたものの、大切な妹のこんな場面に出くわして、どう対処すればいいのか、さすがにとまどったのだらう。

そんなことを考えているうちにいいことを思いつく。姫は腕のなかだから俺の顔が見えないが、王子からは俺の何かたくらんでいる顔が見えただらう。

腕の中の姫に、噛んで含めるように気持ちを確認する。王子に聞かすためだ。

すると姫は思った通り、廊下中に聞こえたであろう声で肯定してくれる。

柱の陰に隠れている王子のからだがびくっとしているのが見えた。ふんっいい気味だ。

あとはこの腕の中にいる姫だ。

壊さないよう、だが強く抱き締めて、俺の気持ちを伝える。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

俺たちが抱き締め合っていると第一王子がふらふらと幽鬼の
 ような顔をしてやってきたのだ。

それがまた癪に触ったのか、奴はとうとうと、感情のない声で、妹を泣かせたらどんな目にあわせるかということを語ってくれた。

まあ折りを見てあいつを紹介すれば誤解もとけるだろう。あいつは女装趣味のあるただの野郎だからな。

21

少しとまどっているようだが、まあすぐに慣れるだろう。

抱きつきぐせのあるローズには、いつかちゃんとおしおきをしなければならぬと考えているが、幸せそうな顔が可愛いので当分は許してやることにする。

第2話 護衛の気持ち（後書き）

ジルとローズのそれぞれのサイドでお話を書いてみました。

もうすこしお話を続けていきたいと思います。二人の周りの人の視点なんかで書いていきたいなと思ってます。

未熟者の東城な上、これは本当に物語りというものを書きはじめて初期の作品なので読みにくかったかと思いますが、ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます。

第3話 噂話

私は城に勤めるしがない門兵のジョーン。

ありふれた名前だけど、両親がつけてくれた名前を私は気に入っている。

ところで、私は今日、おそろしい噂を聞いた。今思い出しても、身震いがおこる。

今日は、そんな噂を一つ話したいと思う。以下、私がその噂を聞いた状況の再現である。

「よう！おはようさん」

朝、一番に声を掛けてきたのは、同じく門兵仲間のギリーだった。

「おはよう」

そう挨拶を返しながら、仕事にかかるため、着替えをすすめる。

ギリも着替えをはじめたわけだが、その顔が何か聞いてほしげに輝いている。

きつとまた何か噂話をしいれてきたな…

私はそう当たりをつけた。なにせギリときたら、街中のおばさまたちの井戸端会議に参加するくらい噂話が大好きなのだ。

まだ私と同じ年で20歳になったばかりだというのに。

はあ。

なにやらげんなりした気持ちになったが、仕方がないので話をふつてやる。

「で？今日は誰の話なんだ？」

するとギリは、待っていましたといわんばかりに話しはじめた。

「今回は、絶対お前も驚くぜ！」

私はいつもギリの仕入れてくる噂話を適当に受け流しているので、どうやら最近のギリは私を驚かすことにご執心のようなのだ。

「前置きはいいいから…」

といって彼の話をきろうつとする私に不気味な笑みを見せるギリー。

なんだ？？

「ふっふっふっ」

気持ち悪い笑みを浮かべるギリーに対し、なにか嫌な予感がした。

「なんと！！あのジル護衛隊長が！！姫さまと付き合っているらしい！！！！」

………。

「……は？」

少し動揺を見せた私に嬉しそうな顔をしたギリーは話を続ける。

「お前密かに姫様のファンだもんな。いやな、これは確実な話なんだよ！なにせ王ご自身が広めている話なんだ。まあ、姫様がジル様のことを想っておられるのは周知の事実だったけど、まさかジル様もとはな…」

そうしみじみ話を続ける同僚の隣で私は呆然となっていた。

ジル様？

ジル様と姫さまがお付き合いをされている…？

あ、ありえない。

ジル様といえば、国民にやたらと人気のある護衛隊長だ。つまりは、王族の護衛をする護衛隊という精鋭部隊をまとめる方だ。

まだお若いというのに護衛隊長を務めるということは、かなりの実力があるということ。

いつもにこにこしているけど、その腹の中に狸や狐を飼っているということは、城内の者であれば皆しっていた。

そして、そのにこにこが姫さまのためになされていることも。

姫さまは本当にかわいらしい方で、ジル様のことを単純バカだと思いい込んでおられる。

その微笑ましさから、皆ジル様の二重人格も黙認していたのだ。

そのジル様と姫さまが??

そんな馬鹿な!!

ふふふ。

どうやら同僚の意表を付くことに成功したらしい。

まあこいつはお堅い奴だから、ちょっとショックを与えすぎたか？

でも事実だしな。

他の奴から聞いてもっとショックを受けるよりはマシだろう。

うんうん。

そう一人で納得しているギリであったが、実はただの嗜好好きではなく、ジルつきの情報収集係であることに、彼の同僚は誰も気づかない。

そして、暇を持て余した彼のおもちゃとなっていることもジョンが気づくことはない。

こうしてジルとローズの関係は、ジルの思惑通り、ローズにほのかな想いを寄せている者たちに着々と広められていくのであった。

第3話 噂話（後書き）

ジルとローズとは関係のない人のお話です。
着々と外堀を埋められているローズなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3560j/>

幸せなおとぎ話を語ろうか

2011年6月10日11時56分発行